

怪力無双かいりきむすぶの第四十六代横綱よこづな

略りやく 歴れき

昭和四年十一月十三日

大島郡徳之島町井之川にうまれる。

昭和十七年三月

神之嶺かみのみね国民学校高等科を卒業する。

昭和三十四年三月二十五日

第四十六代横綱となる。

昭和五十七年

徳之島町めいよちようみん名誉町民となる。

昭和六十三年十月二十三日

五十八歳で永眠えいみんする。



朝あさ
潮しお
太た
郎ろう

奄美あまみが生んだ相撲界すもうの名物男「朝潮」

みなさんは、相撲をとったことがあるでしょう。男の子なら誰でも、その経験はあると思います。今でも学校の行事や地域の十五夜祭などの行事に相撲をとり入れている市町村は多いようです。相撲は、この奄美地区民が最も誇りとするスポーツの一つです。わが国では、日本相撲協会の主催する大相撲おおすもうが、年六回行われています。これは、国技として伝統的な日本のスポーツだからです。

相撲は、昔から盛んで講談こうたんや落語らくごで語られ、浪曲ろうきょくでうたわれ、浮世絵うきよえに描かれるほど人々に親しまれ、江戸幕府えとばくふも相撲奉行すもうふぎようを置いたりして力を入れてきました。

昭和二十年代、奄美群島では協会相撲が盛んに行われ、集落で選ばれた代表によって市町村の選手を決め、徳之島（当時は、亀津町、東天城村、天城町、伊仙町の四か町村）で町村対抗競技を行っていました。亀津村井之川出身の米川文敏少年よねかわふみとしは、十七歳の若さで亀津町代表で天城町平土野で行われた徳之島地区大会に出場しました。彼は、相手を次々に倒し、勝星をあげて一躍有名になりました。しばらくして秋の全郡相撲大会が亀津で行われ、文敏少年は、徳之島町代表で出場し、相手を突っ張ってより倒して勝ちました。この頃、各島々には強い力士が

多かったので、人々は、文敏少年の体格や力におどろき、

「これは鍛きたえたら、将来大物になる。」「奄美の宝だ。」「将来は、横綱だ。」

と、ほめたたえていました。大島本島出身でアマチュア相撲界の横綱が引退するとき、観衆の前で文敏少年を土俵どひょうにあげて、

「私は、この場所ばしょで選手としては引退します。そこで、文敏君の将来に期待し、彼に記念として私のまわしを贈ります。」

と、言って、両手で高くそれを揚げ、文敏少年の手にわたしました。感動した彼は涙を流し、「よし、おれを生かす道は、これだ!。」と、決心しました。しかし、「このまま島にいては、自分の力と技を伸ばすことはできない。どうすればいいだろう。」と、悩みました。

そこへ遠縁にあたる大澤徳城氏おおさわとくしろ（元明治大学相撲部主将すもつがしゅしやう）が来島したのです。大澤氏は、文

敏少年をひと目見て、「これをこのまま島に埋もらせてはもったいない。」と両親を説得してくれました。このようにして、文敏少年は念願ねんがんがかなって名門の高砂部屋たかさごべやに新弟子しんでしとして入門し、やがて朝潮太郎あさしおたろうを襲名しゅうめいしました。そして、スピード出世しゅつせで大関おおせき、横綱よこづなとなり、相撲界の名物男になりました。

生い立ち

よこづな あさしおたろう

米川文敏（横綱朝潮太郎）は、亀津村井之川（現在の徳之島町井之川）に昭和四年（一九二九年）十一月十三日、父米川富忠・母マツの長男として生まれました。文敏は誕生のとき、五・三キログラムもある大きな赤んぼうで、大男だった祖父にそっくりだといわれ、親類しんるいはたいへん喜びました。その後も、病気もせず順調に成長し、同じ年齢の子よりも約十キログラムも重かったのです。父が神戸の会社に勤めていたので、約七年神戸で生活していましたが、太平洋戦争が激しくなり、都会より自然に恵まれ物の豊かな島がよいとのことで、家族は、文敏少年が国民学校高等科一年（今の中学一年）のときに引揚げてきました。

大男がクラスに入って来たのでみんなは驚き、目を見張りました。一番背の高い友達よりもさらに十七・八センチメートルも高いのですから、びっくりするのあたりまえです。

担任の先生は、鼓笛隊を編成こてきたい へんせいしようとしていたときでしたので、さっそく大太鼓を打たせることにしました。文敏少年は、記念行事や祝賀パレードしゅくがなどのとき、鼓笛隊の最後列で大太鼓を軽々と持ち、堂々と行進して回りました。その頃は、出征兵士しゅっせいへいしの家や戦死をした遺族いぞくへの奉仕作業ほうしじぎょうもありました。文敏少年は、それにも進んで参加しました。



町村對抗相撲の朝潮

また、年寄りが重い荷物を持っているのを見かけると、駆け寄って、鍬くわや荷を分けて持ってあげる心のやさしい、思いやりのある少年でした。

彼が十六歳で初めて町村對抗相撲に出場したとき、天城町代表の選手に最初の取組とりぐみで負けてしまいました。そのあと、応援おうえんしていた亀津の人々が、「文敏、つかまえて投げんか。」

と、どなったのです。すると、次の瞬間しゆんかん、しきって立つと同時に相手の両脇りょうわきに手を入れてそのまま土俵どひょうの外に投げたのです。その頃、島の草相撲は三番勝負で二番勝った方が勝ちです。

両者は一勝一敗になり、こんどの相撲で勝負が決まります。相手は、島の横綱ですから技は十分です。三回目は、立つと同時に文敏少年の腰に抱きつき、寄って出ました。このとき、観客は勝負ありと思ったのです。ところが土俵ぎわで、両手で相手のまわしをつかみ場外に出して二勝しました。後でその相撲について文敏少年に聞いたたら、「カまかせに投げて、相手にけがでもさせたらいけない。」

と、言う気配きくばりがあったようです。一方、相手は、「すごい力のもち主だ。普通の技では、勝てない。」と、言っていました。

こうして群島内の対抗相撲に出て、文敏少年の名は有名になりました。周囲の人々は、彼を何とかして日本本土へやって相撲協会へ入門させ、彼の能力を發揮はつきさせたいものだと考えたのです。ところが当時の奄美群島は、アメリカ合衆国がっしゅうこくを中心とした連合国の統治下とうちかにあったので本土へは自由に行き来できなかつたのです。ちょうどそのとき、大澤氏おおさわがふるさとの親や兄弟のことを心配し、墓参を兼ねて帰省したので、これを機会に文敏少年もいっしょに本土へわたりました。それは昭和二十三年の春の頃で、彼が十八歳のときでした。

苦難くなんの修行しゆぎようが始まる

文敏少年は、いろいろな苦難とつばを突破して、ようやく神戸に上陸することができました。まず、おじさんの家へ身を寄せ、そこでお世話になりました。都会は物も少なく、仕事もなく、戦後の混乱が続いていましたが、おじさんの世話で建築現場で働きながらチャンスを待ちました。

一方、大澤氏は東京で実業家や政治家の知人を訪ね、文敏少年を一日でも早く入門させたいとかけ回っていました。大澤氏が国策パルプ株式会社こくさくの水野社長を訪ねたとき、

「よし、私が世話をしよう。」と、言って高砂部屋たかさごべや（横綱前田山親方）に紹介しました。

高砂親方は、文敏少年を見るなり、「おう、これはすばらしい。鍛えると伸びる。」と、言って彼の入門を許しました。文敏少年は、あまりのうれしさに、

「お父さん、お母さん、友人のみなさん、先生、ぼくはがん張ります。」と、誓いました。

しかし、相撲部屋すもうべやの生活は、予想以上にきびしかったのです。まず、番付ばんぷ（新弟子しんどのち、序ノ口じよにだん、序二段じよにだん、三段目さんだんめ、幕下まくした、十両じゅうりょう、幕内まくうち、小結こむすび、関脇せきわけ、大関おおせき、横綱よこづな）があり、一つでも番付が上位の人には服従ふくじゆうしなければならぬしきたりがありました。また、何をなにするにも礼で始まり礼で終わります。朝は五時に起きて道場の清掃をし、その後にはいこがあります。いこは関取せきとり（十両以上の人）が教えますが、その厳しきは口では言えません。動作が鈍にぶかったり、立ち合いが遅おそかったりすると庭ぼうきや竹刀しんたいでたたかれ、おしりや腰は青くなったり、赤くはれあがった



高砂部屋での朝潮（右から2番め）

りするのです。また、ひどいときは髪をつかみ、目、鼻、口に塩をすり込むこともありましたが、それに耐えられずににげ出す人も何人かいました。しかし、文敏少年は、齒をくいしばってがんばりました。彼の生まれた井之川には、「井之川根性」ということばがあります。これは、どんな苦しいことや困難なことがあっても最後までやりぬく強い意志と根性、耐える心を持ちなさいと言うことです。文敏少年は、小さいときから父や母、祖父母から、それを教えこまれていたのです。

ふるさとへ錦を飾る

昭和二十三年の秋、文敏少年は序ノ口じよのくち六枚目に付け出され、四勝一敗の好成績を収めました。翌年一月場所では、一足いっそくとびに序二段に昇進しました。十九歳二カ月で身長が一八五センチメートル、体重九〇キログラムの体格は、千代の山（横綱）以来だといわれ、相撲界の人々を喜ばせました。正直者で素直な彼は、先輩せんぱい関取の教えるとおりの基本を身につけ、スピードしやうしん昇進を果たしました。

三段目では、三場所連続十一勝四敗（当時は下位力士が現在の三分の一しかいなかった。）をあげ、入門して五場所目の昭和二十五年一月には、早くも幕下まくしたに昇進しました。師匠ししやうは、文敏

に四肢踏み四〇〇回、鉄ぼう（突き）を三〇〇回の課題を与え、きびしくきたえました。素直で根気強い彼は、それに耐えてがん張りしました。

その成果が実り、幕下でも勝星をあげて、新十両に昇進し、みごと十四勝一敗で優勝を決め

ました。その力が認められ、翌二十六年一月場所には念願の幕内（前頭）に昇格しました。

これは当時、人気力士の若乃花関、羽黒山関を抜き、二年三カ月のスピード昇進でした。

文敏少年は、昭和二十七年五月、師匠の高砂親方から、部屋の名称四代目朝潮太郎の名前が贈られました。（以後朝潮関と記名）

朝潮は、新弟子より先に起きて四肢を踏み、突きや押し、股割の基本動作を身につけました。その年の九月場所で西前



郷土に錦を飾った朝潮



前頭二枚目の朝潮

頭二枚目に進みました。これからは、大関や横綱ちようせんに挑戦しなければなりません。朝潮は、けいこにも熱を入れ、他の力士より早くから練習し、遅くまでがん張りしました。その成果が実り、横綱羽黒山や千代の山、大関鏡里かがみさとを破って、初めての殊勲賞しゆくんしょうを獲得しました。朝潮関の取闘かんとうを祝うかのように、場所後の十一月、アメリカ軍統治下とうちかの奄美大島、徳之島、沖縄へ戦後初めてじゆんぎようの海外巡業が、横綱東富士あずまふじをトップに朝潮、松登、国登、藤田山等高砂一門たかさごいちもん、総勢三十四名によって行われました。

朝潮関は、二十二歳の若さで前頭二枚目の関取としてふるさとに錦を飾って帰ってきました。骨格たくましく肩幅の広い体に彫の深い顔だち、太いまゆ毛と濃いもみあげ、胸毛などは男性的で立派な二枚目でした。それに相撲が強いので奄美群島はもちろん、日本中にファンが多く、朝潮関の相撲ねっさやうに熱狂していました。

島の人々は、彼を一目見ようと全島から集まり、亀徳港から亀津役場までの道路は車が通れ

ないほどでした。役場前広場での歓迎式が終わると、すぐわが家へジープで駆けつけました。待ち受けていた母は、はおり羽織、はかますがた袴姿のわが子を見て感動し息子の胸にすがってうれし泣きをしました。朝潮関は、先祖の靈に帰省のあいさつをして、はちまん八幡神社やえびす恵比寿神社をおまいりしました。その後、かみのみね母校の神之嶺小学校を訪問し、じゅうはテント十張りを贈って祝賀会場へ急ぎました。会場に来ていた人々は、「彼は、幼いころから心のやさしい、思いやりのある子でしたが、今日ほど彼の行為に感動したことはない。」と、語っていました。

スピード出世で

昭和二十八年一月場所、こむすび小結を通り越していきなりひがしせきわけ東関脇に番付されました。しかし、若いころから彼をむしばんでいた腰の故障のため相手にふどころに飛び込まれると、支え腰がなかったのです。一気に上へ駆け上るものと思われた朝潮関は、この弱点をつかれて関取四場所こむすびで小結に下がりました。腰の痛みはひどくなり、けいこに支障をきたすようになりました。

昭和三十年一月、八場所も守った三役からまえがしらひつとつ前頭筆頭に落ちたのです。しかし、彼はくじけませんでした。父や祖父の教え（井之川根性）を思い出し、好きな酒やたばこをやめ、塩分を絶つ

て節制に努め、病気の克服を図り、再起を心がけました。

場所前の調子はよくなかったが、場所開幕から徐々に調子をあげ、五日目横綱吉葉山をはじめ、横綱千代の山、栃錦を倒して三回目の殊勲賞を獲得しました。二年ぶりの賞で朝潮関は、肉体的故障より精神的に大きく立ち直りを見せました。

これまでの朝潮関は、おとなしすぎる性格が土俵にも現れて、不振に拍車をかけているといわれていました。部屋頭の師匠である横綱東富士は、

「立ち合いのとき、相手がにらんだらにらみ返せ、決して目をそらしてはいけない。」
「いつも相手より〇・五秒、先に立つのだ。」

と、教え、立ち合いの早いときは、朝潮関に勝つ力士はいなかったのです。

大阪太郎の異名

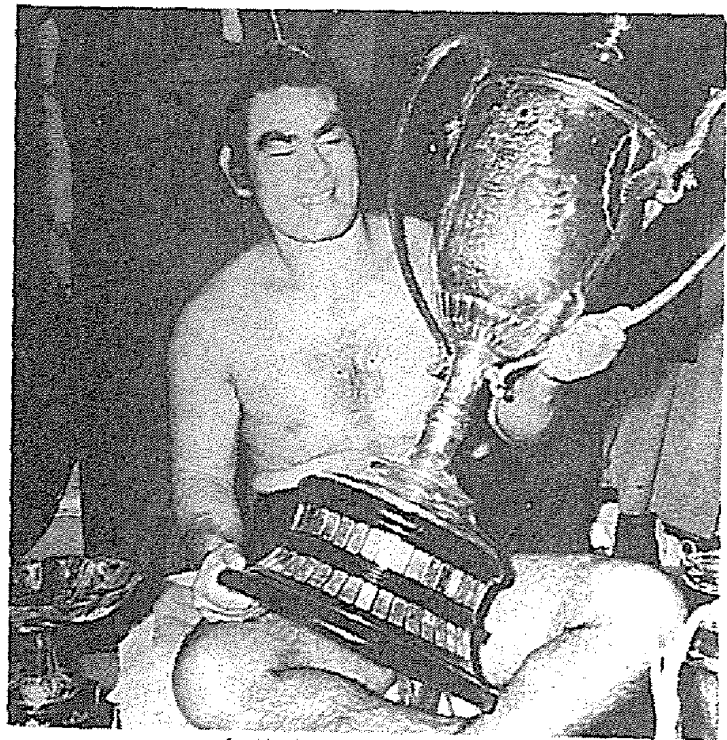
朝潮関は、昭和三十年五月、平幕を二場所で小結に復帰しました。翌年の一月場所においては関脇にカムバックし、相撲内容も一段と進歩してきました。これまでは左からおっつけることに専念していたのですが、右上手を浅く引きつけ、左からハズかノド輪にかけてグイと相手をはさみ、低い重心から押し立てるようになりました。そして最後は、下から押し上げて攻め

きるか、右上手の引きつけを効かせてねじ伏せ、ひねりつぶすのです。このような技は強くて、横綱や大関陣を相手に堂々と正面から立ち向かっていきました。

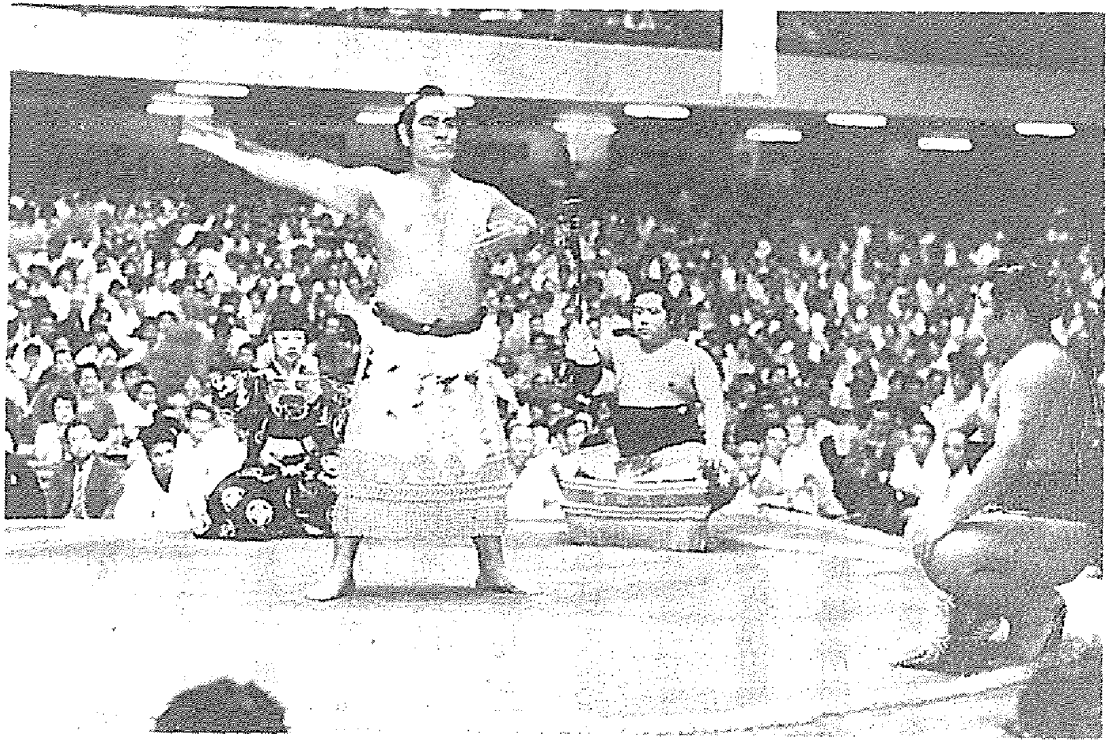
その年の三月、大阪場所ひらまくわかほぐるで平幕若羽黒、大関若

乃花、関脇朝潮の三力士は十二勝三敗で優勝決定戦をすることになりました。朝潮関は、まず若乃花を寄り切り、次に若羽黒を寄り倒して初の大賜杯はいに輝き、四度目の殊勳賞しゅくんしょうもあわせて獲得かくとくしました。

そして、昭和三十二年三月の大阪場所えんぎで十三勝をあげて二度目の優勝を果たしました。十両優勝や幕内優勝は、いずれも大阪場所でした。ファンの人々は、大阪場所は縁起えんぎがいいので「大阪太郎」の異名をつけ、全国のファンからも大阪太郎と呼ばれるようになりました。



天皇賜杯を手にした朝潮



第46代横綱となり土俵入りをする朝潮

念願の四十六代横綱に

昭和三十三年五月場所おおせき しょうしんで大関に昇進し、翌三
十三年大阪場所おおせきで三度目の優勝、その年の九州
場所で大関琴ヶ浜と十四勝一敗の決定戦を行い、
寄り倒して勝って四度目の優勝を果たしました。

昭和三十四年の大阪場所とちにしきで栃錦が優勝し、朝
潮関は準優勝でしたが、栃錦に一敗を与えた実
力が認められ、その年の三月二十五日に横綱審
議委員会で横綱におされ、念願の第四十六代横
綱に昇進しました。

その間も持病の脊椎分離症せきついぶんりしょうと座骨神経痛ざこつしんけいつうのために入・退院をくり返していましたが、強い
「井之川根性」精神で戦ってきました。しかし、
横綱になった五月場所は十勝五敗、七月、九月、

十二月場所は休場しました。さらに、昭和三十五年一月場所十一勝、病氣のために三月、五月、七月場所は休場、九月と十一月場所は十一勝で成績はよくありませんでした。

横綱になって十二場所目の大阪場所において、十三勝二敗で優勝し、ようやく横綱の面目を保ちました。この優勝は、病氣と戦いながら手にした根性の勝利でした。

名門高砂の師匠として

めいもんたかさこ

ししやう

昭和三十六年三月、大阪場所で優勝し、ファンに再起の希望をもたせたが、持病はますます悪くなり、途中休場や全場所休場が続きました。懸命に治療を続けましたが、ついにカムバツクのみどがつかず、翌三十七年の一月場所を前に涙をのんで引退しました。そのとき、横綱朝潮は三十二歳でした。

引退後は、年寄振分親方として後輩力士を育てていきましたが、師匠高砂親方の逝去にともない、高砂未亡人や一門の親方たちの推薦を受けて、五代目高砂浦五郎を相続して名門高砂部屋みぼうじんの親方になりました。このようにして、富士桜、高見山、朝潮、小錦などの人気力士を育て、日本相撲協会の理事として活躍しました。

さらに、審判部長や巡業部長として、相撲協会の発展のために力をつくしました。しかし、

昭和六十三年十月二十三日、全国のファンに惜しまれつつ、五十八歳の若さで逝去せいきよしました。その後、横綱朝潮太郎の功績をたたえ、徳之島町では、昭和五十七年名譽めいよ町民の称号を贈りました。また、全国のファンや郷土出身の有志の方々は、彼の努力と功績を高く評価して銅像を建立する計画をしています。

執筆しつぴつ者 藤田喜秋